



「Zero to One」に挑戦を!

徳島大学長
野地 澄晴 (のじすみはれ)

新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます。徳島大学は皆さまを心から歓迎いたします。徳島大学は、国立大学として1949年に設置されました。現在、徳島大学は、総合科学部、医学部、歯学部、薬学部、理工学部、生物資源産業学部の6学部で構成されています。各学部には、前身の組織があり、その最も古い歴史を含めると創立146年になります。大学院と

して、医科学教育部、口腔科学教育部、薬科学教育部、栄養生命科学教育部、保健科学教育部、さらに、本年度からは総合科学教育部と先端技術科学教育部を再編・統合した創成科学研究科が設置されています。徳島大学では、ノーベル物理学賞を受賞した中村修二博士をはじめ、これまで多くの優秀な人材を輩出してきました。皆さまにも、世界にチャレンジする優秀な人材になっていただくことを期待しております。以下に、私の期待する優秀な人材像について紹介し、歓迎の言葉といたします。

現在、私たちが使用している様々な物やシステムは、過去に誰かが発明や発見をしたものです。スマートフォン、コンピュータ、自動車など、日常的に使用しているものは全て、誰かが最初に考え出したものであり、誰かが最初に考え出すまでは、そのようなものは無かったものなのです。こういったゼロから何かを生み出す様子を、米国シリコンバレーの有名な起業家であるPeter Thiel氏は「Zero to One」と表現しました。日本は、現在「Zero to One」を実現できていません。特に、最先端の研究成果は、「Zero to One」でなくてはなりません。

「Zero to One」でなくてはなりません。通常、研究成果は、科学技術関連の学術雑誌において発表され、世界に公表されるのですが、各論文はオリジナリティーがあるか? 「Zero to One」か?などのポイントから審査され、合格したものが掲載されます。従って、雑誌に掲載された論文の数は、その国の科学技術の水準をかなり反映します。2020年2月20日の日本経済新聞によると、人口100万人当たりの論文数を国別に比較すると、日本は世界で39位となっています。トップはスイス、米国は26位、アジアではシンガポールが8位、韓国が28位です。また、日本の企業の価値もこの30年間で大きく下がっています。なぜ、このような現象が生じているのでしょうか?

日本は明治時代以来、「西洋に追いつき、追い越せ」を目標として、国の体制、特に教育体制を整備してきました。日本の近代化には、高品質な製品を安価で大量に製造して輸出することが必要であり、そのためには、ある一定レベルの人財を多く育成することを必要としました。それは、家電製品や自動車の製造に象徴されま

す。この方針は成功し、日本は世界的にも豊かな国へと発展することができました。しかし近年、日本と同じように「西洋に追いつき、追い越せ」を目標にしてきたアジアの他の国々が、日本に追いついてきました。この事により、日本のこれまでの方針では世界のトップにはなれなくなっています。そしてその状態は30年継続しています。この課題を解決するために、ある一定レベルの人財ではなく、個性的でユニークな「Zero to One」の発想ができる人財を育てるための教育が必要なのです。

徳島大学では、「Zero to One」を生み出す教育や研究に力を入れています。新入生の皆さまが「Zero to One」を目指すための起業も奨励しています。新入生の皆さまには、今まで経験したことのない事にも積極的にチャレンジしていただき、豊かな自然に囲まれた徳島の地の利を生かした大学生活を楽しみながら、素晴らしい人材に育っていただくことを期待しています。



今日の出会いが一生の友

副学長・理事(教育担当)
河村 保彦 (かわむらやすひこ)

徳島大学に晴れて入学された皆さん、誠におめでとうございます。今春は、大学入試の仕組みが変わろうとする時期でいろいろと気をもまれたことと思います。そのような状況下、大学生活の一步を踏み出そうとされる皆さんに、心から敬意と歓迎の気持ちを表させていただきます。春爛漫のこの時期に毎年新入生の皆さんをお迎えし、キャンパスもフレッシュな気運に満たされます。将来大学院進学を希望される皆さんも含めて、大学生活といえますとよい教育を受ける最後の機会となります。今まで多くの皆さんが、小中高校の生活の中で常に学業成績を意識した毎日を送ってこられたことと思います。人にはそれぞれ得意不得意がありますので、大学入学を機会にそうした呪縛めいたものから解放され、各自の特質・強み・深みが活かされる途を見出しはいかかと提案します。

大学入学を契機とする出会い

私が期待膨らむ皆さんにお伝えたいことは「今日の出会いが一生の友」ということです。単純なこの一言には、今になってみますと大きな意味合いがあることに思い至ります。徳島大学に入学された皆さんには、授業やゼミ、サークルでたくさんのお会いが待っていることでしょう。今日初めて言葉を交わしたその人が、あなたの一生の友になるかもしれません。私も大学で生涯の友と出会うことができました。私的な話となりますが、ここで今も親しくしている二人の友について触れさせていただきます。

二人の友

私は理学部で化学を学びました。下宿やサークルでは様々な専攻の人たちと日々同じ食卓を囲みました。その中の一人に中世日本史を専攻する先輩がいました。先輩とは、冬の寒い日も酷暑の夏も毎晩のように専門の「向」探の話や、クラシック音楽、オーディオの話のほか雑談をしながら過ごしました。ある夏休みには、古文書の写真版作成の手伝いをしたこともあり、現像したての濡れた大きめの写真を乾燥させるために、何枚となく大きな模造紙に並べていく作業で

した。皆さんの中にはご覧になられたことのある方もいるかと思いますが、中世の達筆な書体で私には何が書かれているのか皆目わからないものでした。しかし、それは理系の私にはおそろしく経験することのない興味深い体験でした。彼は学部3年生にして部屋の天井まで届くかというほどの専門書を持ち、その学問への強い探究心に私はいつしか大きなアカデミックな刺激を受けました。その影響からか、私は卒業研究着手の春、著名なドイツ人研究者が他大学で講演されることを知り、片道2時間かけて聴講に出かけました。内容を全て理解することはできませんでしたが、美しい化学構造と色とりどりのサンプルの色彩だけが記憶に残りました。大学で彼と一緒に過ごしたのはほんの2年間でしたが、お互い教育研究の途へ進み、今でも親しいおつきあいをしています。もう一人は電子工学専攻の人でした。たまたまサークルで一緒になったその人は阿波徳島の出身でした。今にしてみれば不思議な縁というしかありません。阿波弁を聞いたのはその時が初めてでしたが、ざつとばらんな温かい人柄に魅かれました。専門分野を良く勉強しており、同時に博学の人でした。また彼は単に博

る現場の知見をしっかりと踏まえている点が強みでした。私が徳島に職を得た時、彼の故郷ということでもっとも親しみを感じたことを覚えていています。彼は企業人として活躍し、会うたび音響や映像信号の圧縮技術や製品検査、徳島に帰った後は芋焼酎の発酵技術(！)や香りの成分などについて話し合ったりしました。今は当地に落ち着き、時々家族ぐるみで食事をしたり飲みに行ったりと楽しい時間を過ごしています。私にとつての「今日の出会いが一生の友」です。これらのお会いが今の私に連綿と息づき、日々活力と心の底にあるえもいわれぬ「安心感」につながっています。

新入生の皆さんへ

私的交友録とでもいうべき経験談が、激変しつつある現代に立ち向かわねばならない若人の皆さんに有益であれば幸いです。ぜひ本学入学を機会に、出会った人々を友人として大切に、共にコミュニケーションを取り合い切磋琢磨して学業に励み、一生の友人となりますようお祈りします。そして、皆さんが良識ある社会人として世に羽ばたき、大いに活躍されることを願っています。その一助として、本学が皆さんのお役に立てれば幸いです。皆さんの門出に、心からご健闘をお祈りします。